

<<東北魂>>を鼓舞する
電子新聞

発行所 株式会社遊無有

〒207-0005
東京都東大和市高木3-315-1-2-2
http://www.yumuyu.com/
e-mail:yumuyu@wj8.so-net.ne.jp

東北復興

Rising up , TOHOKU!

2019年(令和元年)5月16日 木曜日

無料

第84号

毎月発行

発行 2019年(令和元年)5月16日 木曜日

【当新聞発行責任者 兼編集長兼記者紹介】

【砂越 豊】

宮城県生まれ、65歳、経営
コンサルタント、趣味は縄
文研究、今年1月に『東北先
史時代学』を提唱、東北から
日本を変えることを標榜。また縄文遺跡保存活動として郷里の涌谷町の『長根貝塚保存活動』開始。映像プロデュース事業にも進出。



『東北のための歴史』を取り戻せ 歴史探求はアイデンティティー探求である

別角度からの歴史談義

お隣の国では、我が国に
対して、誤った歴史認識を
正し、「正しい歴史認識」
に立ち戻るべきだと盛んに
言っている。

お隣の国は我が国の支配
を受けていた時期が確かに
存在する。その時代の歴史
認識を正すべきだというの
が主な主張のようである。

また、その被支配の時代
から精神的に、完全に脱出
したいという気持ちは分か
らなくはない。そしてそう
した被支配の残滓を掃し
たいという気持ちも分から
なくはない。

いまは、それぞれが完全
な独立国でもあり、現実と
して支配・被支配の関係は
まったく存在しないが、半
世紀以上経過したままで、
どうやら完全に脱出出来て
いないから、叫び続けるの
であろう。

それぞれの国の歴史書を
見比べてみたことがないの
で何とも言えないが、おそ
らくは、過去の時代に関し

ては正反対の記述が並んで
いることだろう。

国家間の歴史認識の相違
というのはなかなか厄介な
ものなのだろう。

お互いの面子があり、国
民のプライドも絡み、政治
的な駆け引きもあり、たと
えどちらかが間違っていて
も、はいそうですかと簡単
に引き下がるわけにはいか
ないだろう。

しかし、歴史に対する考
え方というのは非常に重要
であることは確かである。
これから、そうした国家
間の歴史認識問題ではなく、
日本の歴史の定説と言われ
るものと、地方の側から見
た歴史の関係を取り上げ
たい。

歴史は複数存在する

学校教育では歴史はひと
つしか存在しないと教えら
れてきた。

それは疑いようもないこ
とであり、当然であり、歴
史が複数存在するというこ
となど入り込む余地のない
教育を一貫して受けてきた。

歴史教育の中身に誤りが
あるなど考えたこともな
かった。

それほど確固とした学問
が歴史学であり、揺るぎの
ない学問であると教えられ
てきたように感じる。

しかし、いま考えてみる
と、そうした歴史は、神様
が歴史を俯瞰して、一貫し
た時間の流れを見ていると
いう仮定に基づいている。

そうした視点はあり得な
いのであり、ひとつしか
ない歴史も「虚構」といつ
ても過言ではないことが今
に分かる。

加えて、この歳になって
さまざま人が記す、それ
ぞれの歴史に、ある側面か
らの真実が含まれていて、
そうした歴史観が複数存在
することが分かってきた。

さらに、それが自然であ
ることも分かってきた。
当然の帰結として、そう
したものをすべてつなぎ合
わせたら、ひとつにはま
まらない。
やはり複数の歴史が存在
するのである。

個人にも各地域にも それぞれの歴史がある

さらに理屈をこねまわす
と、歴史は個人の数だけ
存在するとしてもよさそ
うだ。

個人とは、ある時代に生
き、ある地域に生き、さま
ざまな立場にいて、さま
ざまな考え方を生かして
いるので、そこからの歴史
観も多種多様であるのは
当然である。

当然ながら、各地域ごと
の歴史も存在してよい。
歴史とは、さまざまな角
度から見た社会や時間の流
れと人間と自然が織りなす
連続した物語である。

とどのつまり、歴史は無
限に存在する可能性がある
のである。

特に勝者と敗者の歴史 とアイデンティティー

そうした歴史の存在可能
性のなかでも、当新聞でも
何度も言及してきたが、勝
者の歴史と敗者の歴史を取
り上げてみたい。

まず、勝者の側からする
と、敗者の歴史を抹殺しよ
うとするのが常道といえる。
それを奪うことは、敗者
のアイデンティティーを奪
うことでもあり、敗者の歴
史から完全に遮断して二度
と立ち上がれないようにす
るためである。
そうした後で、勝者に都
合の良い歴史を押しつける
のである。
敗者を勝者の側に完全に

取り込むための重要な施策
である。

そして、敗者の歴史は永
遠に、歴史の闇に埋もれる
ことになる。

敗者の歴史掘り起こし をプームにしよう!

だからこそ、特に東北の
各地に向けて言いたいのが、
古代以来、何度も負けてき
た東北にこそ、埋もれた歴
史の掘り起こしが必要なの
ではないか。

歴史がそれぞれの地域の
アイデンティティーと直結
しているというのが正しい
としたら、敗者の歴史を掘
り起こせない東北、その敗
者の歴史を大勢で共有でき
ない東北は、アイデンティ
ティーも失いつつあるとい
う言えないか。

乱暴すぎる論理だとか、
言い過ぎと叱られるかもし
れないが、いつまでも負け
たことを悔やみつ、他方
で同士討ちをし続け、勝者
に立ち向かわない東北、立
ち上がれない東北を拭拭し

てはどうであろうか。

東北で歴史の掘り起 しに取り組み

そこで、義務教育に代表
される管制の歴史観から脱
出して、東北各地で歴史掘
り起こし運動を仕掛けては
どうだろうか。当新聞から
小さな提案ではあるが、
涌谷町を題材にした映画を
制作してみよう。

負けた東北、衰退を
続ける東北の過疎の市町村
は、過去の歴史を掘り起こ
したうえで、今後の指針を
じっくり考えてみるべきと
思う。

そうしないことには、衰
退のエネルギーを跳ね返す
ことはおそろしく不可能であ
ろう。

歴史を映像化して共 有しよう

常々感じてきたことであ
るが、歴史は一部の学者た
ちだけのものではない。

また、歴史を一部の好事
家の枠に閉じ込めておいて
も駄目である。歴史は広く
共有されてしかるべきもの
である。

専門家や専門家を装う
人々によく見かけられる、
歴史の細かな部分の知識の
ひけらかしは歴史を学ぶも
のとしては最もいだけな
い態度であると考ええる。

また、歴史を学ぶ、研究
するとは、細かな知識を追
求することではなく、個人
や地域のアイデンティティ
を明確にすることであり
と考える。

そうして、歴史というも
のへのイメージを一新する
必要があると思う。

そのために、文字を中心
とした情報媒介手段として
の書籍等よりも、時間もか
からず、労力も比較的軽く、
容易に受容可能な映像がふ
さわしいと思う。
今後はこうした観点から
の事業をラストワークとし
て展開して行こうと考えて
いる。



古代の朝廷とエミシの国境

なぜか最近メディアに頻繁に涌谷が取り上げられる

TVでも講演でもさまざまな涌谷の歴史が登場する これをきっかけに涌谷の歴史探索に町民が熱中するか？



島田雅彦氏の砂金採り (BS 朝日の「新にほん風景遺産」)



歴史を動かした!みちのく黄金郷 (BS 朝日の「新にほん風景遺産」)

まさか、私の映画『涌谷7000年の歴史』がきっかけとなり、涌谷の歴史がメディアに登場する流れに先鞭をつけたというわけでもないだろうが、最近、涌谷

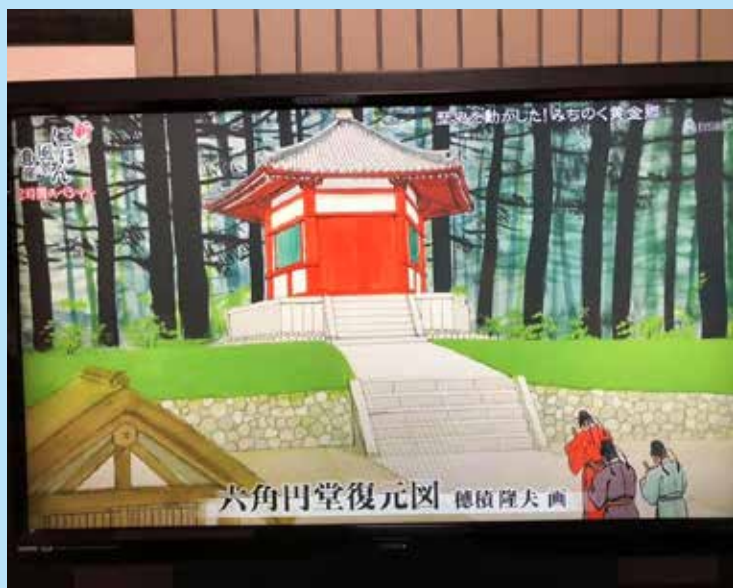
町のさまざまな歴史がテレビや講演会に頻繁に登場するようになった。順番とすると、私の映画が、この三月末であり、企画段階ではどうか知らない



涌谷教育委員会学芸員と島田雅彦氏 (BS 朝日の「新にほん風景遺産」)

最初のテレビ番組は、先月十七日放送のNHKの『歴史ヒストリア』の「黄金の国ジパングを行く一金と日本人の二千年」だった。ここでは涌谷城から眺める遠景と砂金掘りのシーンが、まさに私の映画のシーンとそっくりだった。当方が先であり、似たような企画だが、けっして真似をしたわけではないことをお断りしておく。とはいえNHKの全国放送なので、私の映画よりは圧倒的にネームバリューが違う。

ただ、『歴史ヒストリア』は「産金」のみがテーマであり、総合的な涌谷の歴史紹介ではない。次のテレビは、今月五日、BS朝日の「新にほん風景遺産」という番組で、日本初の産金地として、宮城県涌谷町が取り上げられた。案内役は作家の島田雅彦氏。砂金掘りの場面は、『歴史ヒストリア』と同じ場所だった。残念ながら砂金は出なかったようだ。



六角円堂復元図 (BS 朝日の「新にほん風景遺産」)

どのテーマも私の映画に登場する場面だったので、妙に親しみを感じてしまった。それはともかく、これだけ自分の町が取り上げられるのであれば、そこから町民による町の歴史を探索する運動が湧きおこって欲しいものだ。私は、これまで当新聞にもたびたび書いてきたが、歴史探索は個人の生き方に

も、市町村のあり方にも大きな影響を与えるものだと考えている。そうした運動まで一歩である。ぜひ自発的な運動が巻き起こることを祈っている。



伊達騒動後援会 ②

そして、そうした運動が、過疎化が急速に進行する地方の市町村の活性化策になり、そこから具体的な施策が誕生してくるような流れ

が発生することを密かに願っている。場当たりの、他の市町村とまったく同じことに取り組むような企画は大概うまくいかないのである。



伊達騒動後援会 ①



第57回

水産業再興のための
料理レシピ紹介

【ホタテ貝の チーズ焼き】

とても簡単で、ホタテの
旨味とモッツァレラチー
ズが大変美味しいです。
今、ホタテが旬ですね。
(松本談)



郷土料理愛好家
松本由美子氏

『材料』 ホタテ貝 1個、しめじ 30g、小松菜 20g、油 少々、ワイン 5CC、モツァレラチーズ 30g、バター 2g、塩 1/4、胡椒 少々

『作り方』 ① ホタテ貝を外し、ウロを取り洗います。水分をキッチンペーパーで拭いて、塩、胡椒をします。② しめじを油で軽く炒め、ホタテも 1/2 程焼いておきます。③ 貝にしめじ、ホタテ、小松菜を乗せてワインを振ります。④ フライパンに貝ごと置き、アルミホイルを被せます。⑤ 中火で焼き、グツグツしてきたらホイルを外します。焼き加減を見ながら、出来上がりを決めます。

次回の【第39回 三陸酒海鮮会】ご案内

電子タブロイド新聞【東北復興】が主催させていただく第39回目の被災地復興支援企画【おいしい復興支援（6/1）開催】のお知らせです。あの3月11日の東日本大震災発生から満8年以上を経過しました。最近メディアに登場する機会もめっきり減少してまいりました。しかし被災地はまだまだ復興しているとはいえない状況でございます。そしてまた、今後10年、20年という長期スパンで復興を考える必要があると考えております。そのため、支援する側もそれに呼応し、従来の援助的な支援とは異なった、日常生活にしっかりと立脚し、肩肘張らずに比較的容易に出来る息の長い支援の形が求められていることと思います。

記

1. 日時 平成31年6月1日(土) 16:00～19:00
2. 場所 焚火家渋谷店 渋谷区渋谷1-15-19 東口二葉ビル1F



東北地酒ラインアップ



三陸海鮮



写真でお伝えする
東北の風景

桜満開

写真撮影
尾崎匠



「仙台福連携」の一層の推進を

高速道路でつながった三都市

四月三日、東北中央自動車道の南陽高島インターチェンジと山形上山インターチェンジの区間が開通した。車道が片側二車線、片側一車線となるため、高速度道路が開通したことで、その状況も劇的に改善することが期待できる。しかし、この区間の開通の意味はそれだけにとどまらない。この区間が開通したことで、仙台市と山形市、福島市という、南東北三県の県庁所在地が全て高速道路で一本に結ばれることになったのである。

既に、仙台・福島間は東北自動車道、仙台・山形間は東北自動車道から分岐する山形自動車道によって結ばれていた。今回の区間の開通によって福島・山形間がつながり、それによってこの三都市が高速道路でつながった。元々、直線距離で仙台・福島間は六七・七キロメートル、仙台・山形間は四四・六キロメートル、福島・山形間は五五・二キロメートルと、これら三都市は互いに近い距離に位置している。

密な連携が進む仙台市と山形市

仙台市と山形市の連携については、さらに密な取り組みがなされている。元々、仙台市と山形市は「お隣同士」である。県庁所在地同士が隣接している事例は、仙台市と山形市以外には、京都市と大津市、福岡市と佐賀市の二例があるだけである。もっとも、仙台市と山形市を結ぶJR仙山線、山形自動車道、国道四八号線、国道二八六号線などは、いずれも他の自治体を経由しており、仙台市と山形市を直接結んでいるのは、林道二〇線ただ一つである。

宮城県仙台市地方振興事務所と山形県村山総合支庁とを中心に、仙台市など宮城県の一四市町村と山形市など山形県の一四市町でつくる「仙台・やまがた交流連携促進会議」がある。年に一回「仙山交流連携促進会議」が開催され、関係する自治体職員が集まり、交流する場となっている。

二〇〇七年には、両県の連携による目指すべき将来像やその実現に向けた施策の展開方向などを取りまとめた基本構想である「みらい創造！MYハーモニープラン」が策定された。昨年は、構想の策定から10年が経過した

ことを受けて、両県の連携した取組を一層強化していくための新たな基本構想「未来を共に創る新MYハーモニープラン」が策定された。宮城・山形の一体的な圏域の形成を目指す官民連携の推進組織「宮城・山形未来創造会議」も二〇〇七年に設置され、現在も活動中である。両県の交流活動団体や経済界、県民、行政などを対象に、地域の将来像や今後の連携の方向性について認識を深め、官民を通じた連携の更なる拡大・深化につなげていくための「宮城・山形未来創造フォーラム」も毎年一回開催されている。宮城・山形両県の連携・交流活動団体によるネットワークである「みやぎ・やまがた連携ネットワーク」もあり、連携交流に関する情報発信や交流会の開催を行っている。他に、二〇〇三年から続く「仙山交流味祭(あじまつり)」もある。仙山圏域とその周辺自治体で生産された当地特産物を一堂に集め、生産者が直接に販売する共同産直市で、仙台と山形の双方を会場に開催されている。

もちろん、仙台市と山形市との連携も進んでいる。二〇一六年には、「それぞれの有する資源を有効に活用しながら連携協力することによって、両市の活力を高め、持続的な発展を図る」ことを目的として、「仙台市と山形市の連携に関する協定」が締結された。連携分野は、防災・観光・交流、ビジネス支援

交通ネットワーク、「その他両市の発展に資する分野」の五分野に及ぶ。仙台市と山形市の交流が密であることは、高速バスのダイヤからも窺える。仙台・山形間の高速バスは実に八十七往復(平日)に上る。朝など五分刻みに運行されている時間帯もある。通常の路線バスなど及びもつかな「過密ダイヤ」である。これに対して、仙台・福島間の高速バスも一旦二七往復(土日祝日)と、仙台と他の都市を結ぶ高速バスよりは多いものの、その便数は仙台・山形間のそれには遠く及ばない。

高速バスから見えてくることは他にもある。先に見たように、仙台・山形はもちろんだが、仙台・福島間の高速バス自体が存在しない。これが何を物語っているのかと言え、これら三都市の連携と言っても、それは端的に言えば仙台を軸にした連携、つまり仙台と山形、仙台と福島の間を軸にした連携、つまり仙台・山形・福島が均等なトライアングルになるような形の連携ではないということである。三都市の連携を考えた場合に、何と云ってもこれが最大の課題である。高速道路が開通したことによって、福島・山形間の連携や交流が促進されることを期待したい。実際、先に開

三都市連携の課題

通していた福島・米沢間は、所要時間が格段に短縮されたことにより、行き来がかなり増えた実績もある。同様のことが福島・山形間でも起こる可能性はある。米沢市の名前が出たが、これら三都市を結ぶ線上、あるいはその周辺にある各市町村との連携・交流も忘れてはいけない。特に、福島と山形の間にある米沢市、仙台と福島の間にある白石市は重要である。

目指すべきは「連携中枢都市圏」

これら三都市の目指す方向性として、三都市を中心とした「連携中枢都市圏」の形成を提案したい。「連携中枢都市圏」というのは、「地域において、相当の規模と中核性を備える圏域の中心都市が近隣の市町村と連携し、コンパクト化とネットワーク化により『経済成長のけん引』、『高次都市機能の集積・強化』及び『生活関連機能サービス』の向上」を行うことにより、人口減少・少子高齢化社会においても一定の圏域人口を有し活力ある社会経済を維持するための拠点を形成する」もので、第三〇次地方制度調査会「大都市制度の改革及び基礎自治体の行政サービス提供体制に関する答申」を踏まえて制度化され、平成二六年度から全国展開が行われている。

この「連携中枢都市圏」は、「地方圏において、昼夜間人口比率おおむね一以上の指

定都市・中核市と、社会的・経済的に一体性を有する近隣市町村とで形成する都市圏」と規定されており、平成三二年四月現在、三四市三二圏域が連携中枢都市圏を形成し、近隣市町村を含めた延べ市町村数も三〇四に上っている。東北にはこれまでものころ、盛岡市を中心とする三市五町で形成する「みちのく盛岡広域連携中枢都市圏」、青森県八戸市を中心とする一市六町一村で形成する「八戸圏域連携中枢都市圏」、福島県郡山市を中心とする四市七町四村で形成する「こおりやま広域連携中枢都市圏」の三つがある。

全国を見渡すと、県境を越えて連携中枢都市圏を形成している事例は、広島県福山市を中心とする二市、広島県の四市三町で形成している「備後圏域」と、広島市を中心に広島県の九市八町と山口県の二市五町で形成する「広島広域都市圏」、それに山口市と宇部市を中心とする山口県の六市に島根県の一町を加えた「山口県央連携都市圏」の三例のみである。これらを見ても分かるように、県庁所在地同士が同じ連携中枢都市圏を形成している事例も、三県の市町村が同じ連携中枢都市圏を形成している事例も皆無である。仙台市、福島市、山形市を中心とする三県の市町村が加わった連携中枢都市圏が形成できれば、そのポテンシャルはこれまでにある他の連携中枢都市圏をはるかに

に凌駕するものになると期待される。ただし、三都市を中心に連携中枢都市圏を形成する際に気を付けるべきことは、言うまでもなく仙台市への一極集中を助長する方向性に向かわないようにすることである。放っておいても、仙台市には人が集まる。従って、三都市を中心とする連携中枢都市圏で意識すべきは、仙台市から他の二都市に同じくらい人が向かうための施策に重点を置くことである。連携や交流というのは決して一方通行ではあり得ない。お互いに行き来してこそ連携・交流は成り立ちうる。

仙台市と山形市との関係で言えば、山形にあるもので仙台が逆立ちしても敵わないのは、さくらんぼとそばではないだろうか。毎年さくらんぼのシーズンには山形に向かう車がさくらんぼ狩りがお目当ての車で渋滞する。秋の新作のそばのシーズンに山形に行くとそばを食べるというのも仙台市民にとっては普通の行為である。そのようなお互いの強みが見えれば、交流の方向性が見えてくる。

ヨーロッパには複数の中心市がそれぞれ特化した機能をもちつつ、互いのネットワークによって都市機能を集積しているような「多心型都市圏」があるという。仙台市、福島市、山形市を中心とする連携中枢都市圏も、その

ような姿を目指すべきである。ただし、三都市を中心に連携中枢都市圏を形成する際に気を付けるべきことは、言うまでもなく仙台市への一極集中を助長する方向性に向かわないようにすることである。放っておいても、仙台市には人が集まる。従って、三都市を中心とする連携中枢都市圏で意識すべきは、仙台市から他の二都市に同じくらい人が向かうための施策に重点を置くことである。連携や交流というのは決して一方通行ではあり得ない。お互いに行き来してこそ連携・交流は成り立ちうる。

「東北福連携」の一層の推進を

執筆者紹介

大友浩平

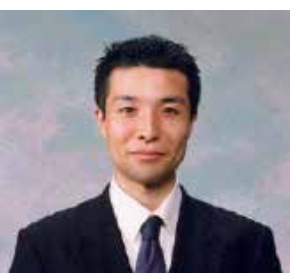
(おおともこうへい)

奥州仙臺の住人。普段は出版社に勤務。東北の人と自然と文化が大好き。趣味は自転車と歌と旅。

「東北ブログ」

http://blog.livedoor.jp/anagmas1

Facebook
https://www.facebook.com/kouhei.ootomo



「宮城県仙台市地方振興事務所と山形県村山総合支庁とを中心に、仙台市など宮城県の一四市町村と山形市など山形県の一四市町でつくる「仙台・やまがた交流連携促進会議」がある。年に一回「仙山交流連携促進会議」が開催され、関係する自治体職員が集まり、交流する場となっている。

二〇〇七年には、両県の連携による目指すべき将来像やその実現に向けた施策の展開方向などを取りまとめた基本構想である「みらい創造！MYハーモニープラン」が策定された。昨年は、構想の策定から10年が経過した

ことを受けて、両県の連携した取組を一層強化していくための新たな基本構想「未来を共に創る新MYハーモニープラン」が策定された。宮城・山形の一体的な圏域の形成を目指す官民連携の推進組織「宮城・山形未来創造会議」も二〇〇七年に設置され、現在も活動中である。両県の交流活動団体や経済界、県民、行政などを対象に、地域の将来像や今後の連携の方向性について認識を深め、官民を通じた連携の更なる拡大・深化につなげていくための「宮城・山形未来創造フォーラム」も毎年一回開催されている。宮城・山形両県の連携・交流活動団体によるネットワークである「みやぎ・やまがた連携ネットワーク」もあり、連携交流に関する情報発信や交流会の開催を行っている。他に、二〇〇三年から続く「仙山交流味祭(あじまつり)」もある。仙山圏域とその周辺自治体で生産された当地特産物を一堂に集め、生産者が直接に販売する共同産直市で、仙台と山形の双方を会場に開催されている。

もちろん、仙台市と山形市との連携も進んでいる。二〇一六年には、「それぞれの有する資源を有効に活用しながら連携協力することによって、両市の活力を高め、持続的な発展を図る」ことを目的として、「仙台市と山形市の連携に関する協定」が締結された。連携分野は、防災・観光・交流、ビジネス支援

交通ネットワーク、「その他両市の発展に資する分野」の五分野に及ぶ。仙台市と山形市の交流が密であることは、高速バスのダイヤからも窺える。仙台・山形間の高速バスは実に八十七往復(平日)に上る。朝など五分刻みに運行されている時間帯もある。通常の路線バスなど及びもつかな「過密ダイヤ」である。これに対して、仙台・福島間の高速バスも一旦二七往復(土日祝日)と、仙台と他の都市を結ぶ高速バスよりは多いものの、その便数は仙台・山形間のそれには遠く及ばない。

高速バスから見えてくることは他にもある。先に見たように、仙台・山形はもちろんだが、仙台・福島間の高速バス自体が存在しない。これが何を物語っているのかと言え、これら三都市の連携と言っても、それは端的に言えば仙台を軸にした連携、つまり仙台と山形、仙台と福島の間を軸にした連携、つまり仙台・山形・福島が均等なトライアングルになるような形の連携ではないということである。三都市の連携を考えた場合に、何と云ってもこれが最大の課題である。高速道路が開通したことによって、福島・山形間の連携や交流が促進されることを期待したい。実際、先に開

「仙山福連携」が探索でヒットするような連携を



早池峰山とDL



SL 銀河

シリーズ 遠野の自然
「遠野の立夏」
遠野 1000 景より

暦では「立夏」。この数か月間は、春に雪が降りたりして、不純な天候が続いていたので、夏と聞いて不意を突かれた思いがする。東京でもつい先日、急激な天候変動で大粒の雹が降ったばかりである。そうしたところに、今回号の遠野の写真には桜が登場して、東京の桜が3月から開花だったので、感覚がついて行けず、何だかめまいを起こしそうになった。きつと体内の季節時間が狂ってしまったのであろう。それでも、自然は大筋で順調に運行していくのだ。花々は一斉に咲き乱れ、山の雪は徐々に消えていく。確実に春が進行して、夏への入り口に近づいていく。



カタクリ



ウメ



ヒトリシズカ



シダレザクラ



ハウチワカエデ



クロモジ

東京上映会開催(5/6) GW中の開催にもかかわらず 貴重な出会いがあった



上映会場 ①

東京上映会開催まで

映画『涌谷2000年の歴史』の制作着手表明直後から、涌谷での上映会だけでなく、東京でも上映して欲しいとの声があちこちから寄せられていました。

とはいえ、涌谷町での本上映会以後、映画制作のために棚上げしていた諸々の所用が山積していて、東京での上映会はのびのびとなっておりませんでした。

そうしていたところ、昨年お会いした在京涌谷会の幹部の方からの電話による上映催促がありました。

在京涌谷会というのは、宮城県涌谷町出身者で東京圏に在住の人たちが作る集まりです。

昨年末、この在京涌谷会において、私が映画を制作することをお披露目したこ

ともあり、そのことを覚えておられた幹部の方からの開催のご催促でした。

三鷹産業プラザで開催

上映会の場所探しにも少し手間取りました。場所確保だけでなく、上映機材と音響設備が揃っていることが条件です。

民間の施設もあたりましたが、最終的に何度か利用したことのある三鷹産業プラザに決めました。

日程は、さまざまな来場者のことも考慮し、休日であることが条件でした。

また、会場探しも休日はなかなか空気がないので、思い切ってゴールデンウィークの最終日に設定しました。

また、来場者の方々のご都合を考慮し、午前の部一回、午後の部二回の合計三

回の上映としました。

さまざまな出会い

当日、はたしてどれだけの人が見に来てくれるだろうかとドキドキでした。

宮城県涌谷という小さな田舎町に特化した映画なので、見に来て下さる方も少ないだろうと不安でしたが、おかげさまでたくさんの方々に観ていただきました。

午前の部では、在京涌谷会からのご参加者の方々、私のビジネスの関係者、それに東北復興関係者と多士済々でした。

午後には、同じく私のビジネス関係者や東北復興関係者、それにかつて同じ会社勤務して大変お世話になった方に約二十年ぶりでお会いするというのもありました。

事前の予約なしだったの

で非常にうれしいハピニングとなりました。

予想外のうれしい評価

そんななかで、ご参加者の方からいただいた映画視聴後の感想が非常にうれしいものとなりました。制作の苦労が一举に報われた感じがしました。

(以下原文のまま抜粋)

本日砂越映画監督兼プロデューサーの第1回監督作品『涌谷2000年の歴史 - 古代の激動の歴史のなかへ -』を鑑賞してまいりました。

涌谷は宮城県の石巻から車で1時間以内に入った名もなき砂越さんの故郷。しかしながら、ここは三内丸山古墳より古い2000年前の縄文時代から貝塚があり、やがて聖武天皇奈良時代に砂金が取れ、またた

ら製鉄の拠点となり、鎌倉時代の幕府側の蝦夷に対するフロンティアの前線基地として歴史の舞台になっていったという。(中略)そして最後の高校生の言葉が素晴らしい。何も無いと思っていた自分の故郷の歴史を知りつつ、皆その関心は涌谷の未来をつくる意識に変わっていた。やはり未来の一步は自分がどこからきたかを知ることからということであろうか。久々の味のある映画監督の出現に次回作が今から待ちどおしいです。

正直なところ、一作目の評価がどうなのかと不安だったところでもあったので、こうした思いがけない評価はまことにありがたいものとなりました。

再上映の声

宮城の涌谷町でも再上映のお声をあちこちからいただいています。まことにありがたいことです。

涌谷での本上映はわずか一日限定だったため、上映日当日にご都合がつかなかった方々には申し訳ないかと反省しております。主催者としては、どれほどの興味と関心を呼べるものかとすごく不安だったことは確かです。上映日時を連続で企画するというのは大それたことと想っていました。

詳細が決まりましたら、涌谷町広報にお願いして事前の告知をしようかと考えております。

この映画を作ろうと思っ

確かに、この映画が披露目されるまで、こうした企画はなかったであろうと思います。

上映をご覧いただいた方々からの口コミ効果があったのかもしれない。

再上映企画予定

現在のところ、日時としては八月中旬のお盆休みを予定しています。

場所は、前回の涌谷公民館から場所を移して、研修館のシアタールームが良いのではないかと考えております。

歴史発掘を広く共有する町民の活動を願う

この映画を作ろうと思っ

た理由のひとつに、さびれゆく町の応急処置的な活性化策を講じるよりも、まずは自分の町の歴史を知ることが一番であり、そのお手伝いのできたらということがありました。

そのうえで、涌谷の町の歴史探索を、町の住民のみならずと共有して、さらに深掘りして行くような運動にまで発展させていただければ、仕掛け人冥利に尽きると思っております。

そのうえで、涌谷の町の歴史探索を、町の住民のみならずと共有して、さらに深掘りして行くような運動にまで発展させていただければ、仕掛け人冥利に尽きると思っております。

涌谷町再上映会企画(8月予定) 再上映を望む声に応じて シアター専用スペースで



再上映予定会場

今後の映像・映画制作方針 1作目のたくさんの反省と 2作目開始の躓きを乗り越えて

一作目の大反省

今年の三月下旬の涌谷での映画上映までは無我夢中で、年甲斐もなく、脇目も降らず突っ走ってきた。また、いまま少し落ちていて思い返すと、一作目の映画は出来上がるまでにたくさんの紆余曲折があった。紆余曲折というよりも、最初からきちんと方針が決まっていなかったというべきかもしれない。それでもよく完成にこぎつけたものだと思いためて思う。

そのことにより、関係者にはずい分迷惑をかけただろうと今頃反省している。とはいえ、何とか完成し、上映が無事出来て、予想外の評価も一部でもらえたので、ほっと一安心である。しかし、他人に任せるということはなかなかむずかしい。ましてや気心知れた仲間でもないグループとの共同作業を目指すというのである。

勇んで二作目に取 りかかろうとした が・・・

一作目の予想外の出来に気を良くして、一回目の上映直後にすぐ二作目に取りかかることにした。一作目の興奮と熱が冷めないうちに取っかかったほうが良いとの判断だった。一作目は撮影と画像編集以外は何でもこなしたためへとへとになった反省を込



縄文

め、次はプロデューサー業に徹しようと考えた。それで大半の作業を請負しようとした。しかし、他人に任せるということはなかなかむずかしい。ましてや気心知れた仲間でもないグループとの共同作業を目指すというのである。ましてや、初映画を撮ったとはいえ、素人同然である。交渉がうまくいくわけがない。やはりというべきか、失敗に終わった。出直しである。

失敗から得た基本 指針のドキュメン タリー

その交渉失敗でいまさらながら気づいたことではあるが、私は役者を使って架空の物語を作りたいわけではないことが分かった。小説も同様で、作り物はどうも苦手である。あれ以来、真実に迫る手法としての作り物は以前にまして避けるようになってしまった。

基本スタンスはドキュメンタリーであり、現在や過去の現実により肉薄しているというところが目指す方向であった。

その伝達手段としての映像活用であり、文字のみの出版という手法ではない、デジタルでより効果的に訴えていくという方向性をあらためて確認することになった。

こうしたことも実際のその場面に遭遇しないと十分



アテルイの戦い

に納得できない性質である。そうした意味では、不成功に終わった交渉ではあったが、意味ある発見をしたこととなる。

不幸中の幸いであり、遠回りの確認でもあった。

今後目指すもの

ドキュメンタリーを目指すといても多種多様な分野がある。

私が目指す分野候補は、まず歴史発掘である。

しかし、歴史は広いので、日本古代史に絞ることに決めた。特に東北に関連する古代史を中心にしていく。

次は東北の伝統芸能である。見方を変えれば、伝統芸能というのは、『生きた歴史』でもある。

それが東北では埋もれている。これを再発掘しない手はない。

三つめは、古代からさらに時代を遡り、数千年前から



伝統芸能

ら一万年前の縄文文化を掘り下げるのである。あの震災による精神的なショックへの答えは、そこにあるとの直観がある。

これらの分野も素人ではあるが、素人なりの直観で掘り進んでいきたいと思う。

本格的な組織で対応

そうしたことを決め、こしはらく取り上げてみた。

そうしたらこれまで見慣

れたテーマがすぐ浮かんできた。あまりにも多くのテーマであり、自分の残りの時間を考えると、たった一人で、全部抱え込んでの制作は出来ないことが分かった。

そこで、きちんとした組織を立ち上げて取り組むことを決めた。

しかし、資金的な課題も立ちふさがり。

最初は小さく、徐々に大きくしていく方法で対応し

ていこうと思う。ラストワークになるであろうが、後戻りしないように邁進しようと思う。

